



# 天 気

1989年1月  
Vol. 36, No. 1

## 巻 頭 言

### —理事長就任に際して—

理事長 浅井 富雄

1988年7月、第25期役員改選に伴い、私が理事長をお引き受けすることになりました。微力ではありますが、理事や委員の多くの方々の献身的な御支援のもとに、気象学会の一層の発展のために全力を尽くす所存です。会員の皆様の御協力をお願いいたします。

さて、第二次大戦後急速に発展した気象学は大気科学としての基盤を確立したといわれて以来、既に20年余を経ました。その間、GARP、MAP等が実施され、現在WCRPが進行中であります。このように今日では国際協同観測・研究は日常茶飯事となりました。大気科学は気圏、水圏、地圏、生物圏など地球を構成する各圏がエネルギーや物質の循環を通して相互に作用し合う過程の解明を目指す地球系科学へさらに発展しようとしています。近年、グローバルな地球環境が人間活動の影響問題に端を発し、単に学術的立場からのみでなく、世界的に各国政府レベルの問題となり、我国でも関係各省庁が一斉にそれぞれの立場から地球環境問題を探りあげています。気象学会はこれに適切に対応し学術的立場から指導性を発揮しなければなりません。同時に、その他の多くの基礎研究、特に現在陽のあたらぬ研究分野をも大切に育てる努力が肝要であります。

これまでの気象学の発展の歴史を振り返ってみますと、研究対象・領域の拡大、新しい技術の導入などに伴われて気象学が大きく飛躍してきたという事実を見逃す

ことができません。気象現象をグローバルに総合的にみる必要に迫られつつある今日、ますます周辺関連諸学会との協力を密にしなければなりません。堀内会員の御厚志に基づき、昨年、気象学の境界・周辺及び未開拓の分野に挑戦し、気象学-気象技術の向上に貢献している研究を奨励するための賞として「堀内基金奨励賞」が新設されました。昨年10月仙台の秋季大会においてその最初の表彰が行われたことは御存知の通りであります。

国内関連分野の諸学会との協力と併行して、諸外国との国際協力の強化はもう一つの重要な側面であります。GARP、WCRP等の大規模な国際協同研究計画への参加とは別に、4年前から「国際学術交流基金」の充実を計りつつ、一方で国内で開催される国際研究集会の援助や国外でのそれへの若手研究者参加旅費の一部補助をしてきました。既に22名の会員が旅費の補助を受けました。会員の皆様を始め学会外からも御理解・御支援をいただき、現在、「基金」もその果実で安定的に運用するという当初の計画を実施し得る目途がつかしました。僅かではありますがその主旨に沿って効果的に活用していく所存です。米国地球物理学学会(AGU)の提案を受け入れ、国内地球物理学関係諸学会と協力して1990年夏、日本でAGUの研究集会を開催する準備を始めました。また、1993年国際気象学・大気物理学協会(IAMAP)第6回特別研究集会を日本へ招致することを検討しつつあ

ります。第一線で活躍している諸外国の多くの研究者と直接話し合い、顔見知りになることで、論文のやりとりを通してだけでは得難い有形無形の効果がその後の研究活動においてあらわれます。できるだけ多くの会員にその機会を提供することも大変重要なことだと思います。

研究の成果や過程についての発表や討論は学会にとって最も重要な活動の一つであります。申すまでもなくそれらは主に機関誌（天気、気象集誌、気象研究ノート等）と講演会（春、秋の大会、月例会、その他各種研究会等）によって行われています。春秋の大会での口頭発表数は20年前の～150件から今日では～250件に達しています。大会の期間や会場数の制約のため、心ならずも1人あたりの発表件数の制限や1件あたりの発表時間の短縮などせざるを得なくなっています。質疑討論の時間も不足し、これらに不満をもらす会員も多いときいています。発表様式について今後さらに工夫し改善しなければなりません。既に皆様御存知の通り、今年の秋季大会は11月7日～9日那覇市で開催されます。沖縄支部会員の方々の御尽力に感謝すると共に初めての沖縄大会が盛会になることを願っています。これを機会に、今後、これまでのいくつかの大都市のみに限らず広く各地で大会が開かれるようになることを期待しています。一方、気象集誌はその掲載論文篇数～50、頁数～500の20年前から、今日では～80篇、～1,000頁へと増大し、質的にも向上しました。20年前までは10%にも満たなかった外国からの投稿論文も1970年代以降20%代に達し、国際誌

JMSJ としての評価も高まりつつあります。気象学においては基礎と応用はいわば車の両輪であり、両者が相互にフィードバックしながら発展してきたことを考えると、最近、応用的・技術的分野の研究発表が少ないように思えることがいささか気がかりです。もっとも、それらは気象学会以外の場でも発表されるのでしょうが、もっと賑やかになって欲しいものです。大変重要な「天気」、「気象研究ノート」、夏季大学をはじめとする教育と普及活動等については紙数の都合上別の機会にふれることにします。

私達をとりまく環境は学術的にも社会的にも早いテンポで動きつつあります。気象学会はこれらに対処し、学術的立場からリーダーシップを発揮するためには学会の足腰も丈夫にしなければなりません。即ち組織と財務を健全なものにすることが不可欠です。数年前、気象庁職員の定年退職者の激増などのため、会員数の減少が懸念されましたが、多様な職種の新入会員増によって、その心配はなくなり会員数は1988年10月現在4,386名であります。一方、年間予算は1億円に達し、これまでの家内・手作業的事務体制の改善がはかられねばなりませんし、日常的活動を支える委員会制を強化しなければなりません。とはいえ、学会は基本的に会員個人の学問的興味・知的好奇心と熱意に基づく切磋琢磨の場であり学会の発展はひとえにそれら個人の創造的活動に依存しています。学会の運営についても皆様の御意見をどしどしお寄せ下さい。



## Micro burst の発見に成功し、 航空機の墜落を防止した！

1988年9月8日付のデンバーの新聞によれば、昨年から行われている Doppler Radar を使用した micro burst を探知し、航空機の安全を計る project で、7月11日に

micro burst を発見し、即座に、着陸や離陸をしようとしている航空機に通報し、非惨な航空機事故を未然に防いだ、ということである。